
夏の日々、そして明日へ。 -Tomorrow with summer-

とち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の日々、そして明日へ。 - Tomorrow with sunmer -

【Zコード】

Z7535A

【作者名】

とち

【あらすじ】

私はきっと夏を恐がっていたんだろう。それは一人だからかもしれないし、不安だからなのかもしだれない。だけど今は違うと胸を張つて言える。私には、夏の日々が夢や希望に溢れた明日へと続いているように見えていたのかもしれない。

(前書き)

「夏」をテーマに書き上げた企画小説です。他の作家さんの作品は「夏小説」で検索をすると見つかるかと思います。是非、読んでいくくださいね。あと感想もよろしくお願いします。

今日の日差しは、いつもよりも強そうに感じた。

ただただ毎日を繰り返すばかりの学校と、きっと死ぬまで好きにはなれない梅雨の時期がとうとう終わりを告げた今日この日。代わりに訪れたのは夏を呼ぶ蝉の鳴き声と、朝日を浴びて一杯に咲き誇るアサガオと、高く大きく広がる入道雲だった。

夏が訪れていた。

掛け替えのないモノを亡くした日、いつになつても忘れられない日、私が一人になつてしまつた日、嘘をついた日、泣き崩れた日、雨の日。

夏は確かに訪れていた。

そして私は一人、ここに取り残されてしまつたんだろう。亜美が突然いなくなつたんじやない、本当は私自身が何処かに消えてしまつたんだ。だから私は一人でいる。

「暑い」

今日の気温は、いつもよりも高そうに感じた。

今日はきっと暑い日なんだろう、そう思う私はやっぱり一人ぼっちなのかもしねりない。

夏は、もう訪れていたんだろう。
それに私が気づかなかつただけなんだと思つ。

学校は気がつけば終わっていた。

進級して、クラス替えをして、新しい学年と教室になつて、勉強して、掃除をして、テストをして。それを四ヶ月も繰り返したんだ。時間にしたら、それはとっても長い時間だつたんだと思つ。きっと嫌気が差すくらい面倒だつたに違ひない。

でも、学校は終わった。

そして、夏休みが始まつていた。

「あー、暑いな」

今私のとつてのせめてもの救いは、汗を搔いた麦茶とさつきから首を左右に振り続ける扇風機だけ。暑い、それ以外の言葉なんて何も浮かばなかつた。もともとエアコンは使わない家だつたし、そもそもそのエアコンすら家にはない。夏には全ての部屋の窓を開け放ち、一人一台と並べられた扇風機を全て動かす。それが私の家の夏天つた。

蝉が遠くで鳴き始める。

それは五月蠅いようで、でもそれを聞くと夏が来たんだなつて実感でき、だけどやっぱり暑いことには変わりがなくて、けど嫌いじゃない。夕方にひぐらしが鳴くよりは、日中からけたたましく鳴く蝉の方がまだ良いと私は思つていた。

今のは誰もいない、いるのは私だけ。

お父さんもお母さんも仕事で家にはいない。つづん、私自身も親をあまり見たことがない気がする。どちらも朝早くから夜遅くまでの仕事らしいし、仕事が休みの日には寝室でずっと寝ていて部屋からは出でこない。だから、『飯を食べるときとかくらべにしか顔を見たことがない気がする。

周りの皆みたいに家族で旅行とかも行つたことがないし、なによりあんまり喋つたこともない気がする。

そんな親だから、あの時だつて……。

あー、やめよ。こんな話ばっかりしてたら何もかもが暗くなりそ

うだ。

とにかく家に親はない。それだけで、それ以上にも以下にもならないのは確かだ。一つだけ付け加えるなら、この夏休みの間に親が帰つてくることは絶対にない。何でも、仕事の関係だとか何とかで二人とも出張らしい。本当、ひどい話だ。

だから親が帰つてくるまでの一ヶ月くらいは私一人だけつてことになる。そう、私が一人だけ。たぶん買い物とか以外には何にも用事なんてないし、誘われて出かけようとも思つてないから、本当に一人になるんだと思う。

「今夜は暑いから蕎麦にしよう」

でも、それでも良いかなつて少しだけ思つてもいた。

誰かに言われるわけでもなく、誰かに強要されるわけでもなく、ただ何となく日々を過ごしてていた。朝に起きて、ご飯を食べて、暑い日中を扇風機だけで過ごして、お昼を食べて、夜になつて食べて、そして寝る。その繰り返しだった。外に出ることもなく家のの中で一日を過ごす日々。毎日の繰り返し。一つの習慣。まるで学校にいるみたいだった。

朝の決められた時間に登校して、決められた時間に授業して、お昼を食べて、午後の授業を受けて、掃除をして帰る。それの繰り返し。同じことを繰り返す日々。

そう考へると、この毎日を繰り返すだけの日々が嫌になってきた。別に学校が嫌いと言つわけでもないけど、でも学校と同じことをしていると思うと自然と体が嫌がつた。何とかしたいと本気で思った。生活のスタイルとかリズムとかを変えようと考へた。外に出ようと自分で自分に言い聞かせた。

そして一週間があつという間に過ぎていった。
結局、私は自分から何もしてはいなかつた。しようとも思つていなかつた。今度こそと思つても、次の日には忘れていた。きっと面倒

くさかつたんだと思つ。何か新しいことをして苦労するより、今まで樂をしようと思つていたに違ひない。そして気がついたら一週間が過ぎていた、それだけの話。

何だかんだ言つて、きっと私はやる氣がないだけなんだと思つ。

全く関係のない話をするけど、もしこの地球の何処かに神様つて言う存在がいるとしたらきっと私はその神様つてのに嫌われているんだろうと思うことがある。

何で、って言われると「奪われるから」って答えたんだろう。きっとそう答えた。だつて本当に奪われているから。何もかも奪われている。私の周りにあるものは「ことごとく消えていつてしまうんだ。酷いにも程がある。

そして今日も一つ、私の大切なものが奪われようとしている。それは私の日常だ。この夏休みだけの生活。私一人だけの生活。それがさつきから鳴るチャイムに奪われようとしているんだ。もし、そのチャイムがたつた一回だけだったら私も出ることはなかつた。それは逆に何度も何度も鳴らすのにもだ。なのに今も鳴るそれは違うものだつた。早すぎることもなく遅すぎることもなく、常に一定のリズムで鳴り続けるチャイム。私は何故か、それは誰が鳴らしているんだろうと氣になつっていた。

もう、その時には奪われていたんだと思つ。その神様つて言つて私の生活を奪われた瞬間なんだと思つ。
気がついたら、私は立ち上がりて玄関に向かつていた。

「はーい、どちら様ですかー？」

ピンポーン。

「今開けますからー」

ピンポーン。

「はいはい、今開けますつてば」

ピンポーン。

「はいはいって」

鍵を開けて、扉に手を置く。ノブを一杯に回してゆっくりと開けていく。扉が開いた瞬間に外のもわつとした空気が私を通り過ぎて家の中にまで入つていった。

扉が開く。

ゆっくりと静かに、それでも確實に。

「よ、元気してたか」

そう言って迎えたのは河田くんだった。ううん、はじめは誰だかわからなかつた。河田くんに似た誰かが立つているようにしか見えなかつた。でも、そこに立つのは本物の河田くんだと私の中の誰かが言つていた。

はじめに思つたのは「何で？」次に「どうして？」どっちにしろ疑問しか私の頭には浮かんでこなかつた。河田くんが私の家に来る理由なんて今はもうないし、そんな予定をした覚えもない。大切な人を失つて、それで二人の接点もなくなつた私達に会う意味はないし、必要もないと思う。なのに彼は來た。それがどうしてもわからなかつた。

「あのさ、中に入つていいか？外は暑くて死にそくなんだよ」

「あ、う、うん。いいよ」

居間に案内する。前にも何度も家に來たことがあるから、たぶん案内しなくてもわかるんだろうと思うけど、でも私の後ろにつく河田くん。後ろに誰かがいると思うだけで、少しだけ緊張するのは何故だろう？ちょっとだけ不思議に思つた。

扇風機が回る居間に座る。河田くんも同じように座る。

そもそも彼は何をしに來たんだろう。もう一度だけ考えてみた。私に用があつたんだよね、たぶん。だつて親が出張でいないことは知つてゐる筈だし、妹がないことも知らない筈がない。なら私に用があつたことになる。でも、何で？彼から私に対する話なんて、そんなことあるわけがないし。あつたとしても、それはあんまり大事な話じゃないと思う。だから河田くんが私の家まで來ることなん

てない。何より、河田くんは私と話すことすらないんじゃないかなとも思える。

じゃあ、どうして？

やっぱり考えても考えても、何にもわからなかつた。

「あのさ、ちょっとといいか？」

そんな中、先に口を開いたのは河田くんの方だつた。やけに真面目そうな顔をしながら問う彼の表情に何處か心配の色が見えていたのは私だけだろうか。うん、きっとそれは私だけなんだろ？

「あ、うん。何？」

「お前、外に出てるか？」

「え、出てないけど」

夏休みに入つてからは一度も家の外には出でていない。あの雨の日以外はだけど。でも、それが悪いことだとは思つていないし、それを変えようとも今は思つていない。

「やつぱり。それは良くないつて」

「良くないの？」

「良くないに決まつて。お前、気づいてないだらうけど顔色悪いぞ」

「そんなことないって。ほら、全然ピンピンしてるよ」

そう言いながら両手で両方の頬を叩いたり、腕をくるくる回してみたりして見せる。自分でもこれはやり過ぎだと思つてゐる。なんだか焦つているような氣もするし、冷や汗を搔いた氣もしてゐる。まるで、言われたくないことを言われてしまつたみたいに。

「いや、それだつて無理してるだろ。だいたい家から出ないで何してんだよ」

「いや、だつて」

なんだか目の前に座る人が河田くんじゃない人みたいに思えてきた。例えるなら、そう学校の先生みたいな人。その人がずっと喋り続けていて、私が言い返せないような状況。今はきっとそんな感じなんだと思った。

「だつてじゃないだろ。そうやつて自分の殻に籠つて何処が良いんだよ。それで良いとか本気で思つてんのか？それで何とかなるとか、忘れられるとか思つてんのかよ。お前は本当にそれで良いのかよ！何かが、私の中にある何かの糸みたいなのが切れた気がした。ブチンつて大きな音を立てて、確かに千切れたんだと思つ。切れた。

確かに、切れたんだ。

「ねえ、悪いの。私つて本当に悪い？自分が出たくないから出ないだけなのに、それだけでそこまで言われなきやいけないの。河田くんの言う通りかもしないよ。殻に籠つてるだけなのかもしない、でもそれつて本当に駄目なことなの。誰にだつてきっと殻はあるんだよ。なのに、それに籠るのはいけないことなの？どうして、どうして駄目なのよ。もう、私、何もわからない、わからないよ」

もう自分で何を言つて良いのか、何を言つたら正しいのかなんてわかつていない。考へてもいない。それ以前に考えられないんだと思う。ただただ河田くんが言つ言葉に反応して私が答えるだけ。答えるといつても単に私の中に埋もれた艶みたいなのを吐き出すだけなんだろうけど。

「悪いとは言つてないだろ。ただ、そうやつて自分で考え込もうとするのがどうなんだってことなんだよ。それじゃ自分だけが悪いみたいじゃねーか。それにな、皆だつて殻はあるつて言つたよな。それはそうかもしれない、誰にだつて、俺にだつて殻つて言つるのがあるのかもしない。でも、だけど俺はそんな殻には籠つてないんだぞ。俺だけじゃない、皆だつてきつとそうだ。なのに、お前だけはそうやつて籠るのかよ。それつて逃げてるつてことなんぢゃないのかよ」

「逃げてるつて、それは本当かもしれないけど、でも、それつて私だけじゃないでしょ。皆だつて逃げてるよ。それが何なのかは知らないけど、だけど人は逃げるんだよ。とてつもなく大きな何かから必死で逃げるんだよ。なのに私だけが逃げるみたいな言い方

するなんてするいよ。河田くんだって何から逃げてるんでしょう？

それと一緒になんだよ」

冷静に考えたら、私の言つことは理不尽なのもなんだと思う。うつん、理不尽そのものなんだ、きっと。人は確かに何かからは逃げているんだ。それは人それぞれなんだろうけど、でも何かから逃げていることには変わりはない。そのことは正しいと思ってるし、自分の意見が間違つてるとかは思えない。ただ、それに対しても皆が皆、逃げているのは違う。

逃げる以外にも、人には出来ることがある。

立ち向かうことだって人には出来る。

でも、私は

「そうかもしれない。俺だって何かから、いや何かじゃない、死んだ亜美から逃げてるのかもしれない。でも、でもさ、それでも俺達は生きてるんだ。亜美は死んだけど、でも俺達は生きてる。だから生きていなきやいけないんだって。それはお前も同じことの筈だろ。お前も、俺も、生きてるんだよ。だから、俺達は前を向いて進まなきやいけないんだよ。過去に囚われて先に進めないんだって言うなら、それは逃げることと同じなんだって。立ち止まつたらいけないんだ、俺達は前を向いて、それで先に進んでいかなきやいけないんだよ」

「わかるよ。河田くんが言いたいことも凄くわかる。そうだもんね、そうやって前を向くことが大切なと思う。うん、わかる。だって私達は生きてるんだもんね。でも、でもね、それで全部が全部を片付けちゃいけないと思うの。それで、はいお終いみたいなことは私はしたくないの。だから、河田くんが言つこともわかるけど、でも納得は出来ないと思う。だって、私、亜美のこと忘れたくない亜美と過ごした日々。私と亜美と、それに河田くんとでいた日々。その思い出の中に埋もれた日々は、もう一度と戻ることのない日々。私が亜美の姉として、河田くんが亜美の彼女としていられた日々。私にとって、きっと彼にとっても忘れられない、それでいて大切な

ものなんだと思つ。いや、そうであつてほしい。そんな思い出を簡単に忘れるなんてこと私には出来っこない。

でも、それは思い出に縋つっているだけなのかもしれない。
だけど私は、捨てたくない。

忘れてたくない。

「俺は別に亜美のことを忘れるとか言つてるわけじゃないんだ。ただ、その過去とかに囚われ続けるのが良くないって言つているだけで、お前がそのせいで前を向けなくなつてしていることが心配なんだよ」「ううん、やっぱりわかんないよ。何で? どうして河田くんはそうなの? そうやって割り切れるわけ。私にはそんなこと出来ないよ。忘れるなんて、そんなこと簡単に出来るわけないじゃない!」

そこで言葉が途切れた。

私の上げた怒鳴り声に続いたのは静かな虚無だつた。
誰も、何も喋らない。静かな時間が流れしていく。河田くんは黙り込んで、だみたいで身動き一つしない。顔は……見えないけど、きっと暗そうな顔をしているんだろう。私も似たような顔をしているに違いない。

外から、それも遠くの方からだけ、聞こえてくる車の音以外に何も聞こえてこないのが不思議で仕方がなかつた。次第にその車の音でさえ聞こえなくなつてくる。

無音。

そう思えるくらいの静けさがあつた。まるで河田くんの心臓の音が聞こえてきそうな程に静かな時間。もしかしたら、今この瞬間に地球上にいる全ての生き物が絶滅して、それで生き残つたのは私達だけなのかもしねり。

そんな、どうでもいいようなことを考える暇さえなかったくらい時間が流れていった。

ついさっきまで自分の意見を言い通していたのが随分と昔のことのようにも思えてくる。でも、側の時計を見ると五分がやつと過ぎた頃だった。その感覚としての時間のズレにも驚くものがあつたけど、

それより私が驚いたのは、私が時計を意識して初めて時計の針の音が聞こえてきたことだった。

私はやっぱり何処かが壊れたのかかもしれない、そう思った。でも、こうして何もしないで時間を過ぎ去ることが懐かしいように感じた。ちょっと前の私は目に見えない何かを抱え込んで生活している、そんな風な感じだったと思う。だけど、今の私には背負うべきものが無い気がした。もしかすると、さつきの喧嘩みたいなもので落としてきたのかもしない。それが良いことなのか、今の私に確かめる術はないのかも知れないけど、素直に楽だと感じていた。

音のない世界。

気が付けば、また針の音が聞こえなくなつていて。

けど今の私にそんなことはどうでも良くなつていた。私の視界に捉える河田くんにだけ意識が集中しているような感じ。相変わらず黙り込んだままの河田くんはさつきと何処も変わっていない。顔も見えないし、その下で怒っているのか泣いているのかもわからない。

ただ一つだけ、疑問が浮かんできた。

彼はどうしてここにいるんだろう?よくよく思えば、さつきの言いくらいで河田くんから言つことは何もなくなつたようなものなんじゃないの?もしさなら、彼が私の家にいる理由なんて何処にもない。なのに彼はまだいる。といふことは、まだ何か用事があるってことなんだろうか?でも、これ以上のことでの私に用なんかあるのかな?それに、もし彼が私に何か用事があったとしても、それはさつきので全てなくなつたような気もする。

結局は、今の私には確かめることなんて出来そうもないけど。

ただ私がわかることは、今この場に私と河田くんがいて黙り込んでいることだけ。彼が何を考えているのかはもちろん、彼が黙り込んで何も喋らない理由なんて一つもわかる筈がなかつた。

結局、入つていうのはそんなくらいなものなんだと思う。人にはそれぞれ、それもたくさん思いや、考えや、信念つていうのがあって、それは決して他人に知られることはない。少しくらい感づかれ

たとしても、それは絶対に全部が見透かされた訳じゃなく、そのち
ょつとした一部を当てられたに過ぎないんだ。

つまり、自分だけの世界。

そういうことなんだろう。人は自分だけの世界を持つていて、その中で生きている。河田くんには河田くんの、私には私の世界がある。誰にも邪魔されたくない世界がある。

きっと喧嘩とか言い合いとかそういうのは、自分の世界のぶつけ合いなんだと思う。ぶつけて、相手にわからせようと無理をしているだけなんだと思う。

それは少しだけ悲しい気がした。

だって、本当ならそれは自分が信じるものと相手に伝えるだけのこと。それが行き過ぎた形でぶつけ合ってしまう。その思いを相手に伝えたいだけなのに、その思いだけが先に進んでしまって空回りするようなもの。

それはやっぱり悲しい。

だから、今の私達のこと、二人の間に挟まれた世界も悲しい。

それだけじゃない、死んでしまった人が信じた世界はもつと悲しい。だって、死んだらもうそれつきりでしょ？

「ねえ、一つだけ聞かせて」

自然に、それとも勝手になのかもしない、私は口を開いていた。

「何だ」

さつきまで俯いていた河田くんが顔を上げて私を見つめる。その瞳に映る私は、それは彼にはどう見えているんだろう。ちゃんと私を見ているんだろうか？ それとも私じゃなくて何処か遠くの方を見つめているのだろうか？ それはやっぱり私にはわからない。だって、それは河田くんが見ているのもであって、私が見ているものじゃないから。それは私の入れる世界じゃないから。

「我だけじゃわからないから聞かせて。亜美はきっと幸せだったよね？ きっと幸せでいられたよね？ 私みたいにちつとも悲しくなんかないよね、泣かないでいられるよね？ 今頃、天国で笑って私達のこ

と見ていいよね？」

何だからんだ言つて、偉そうなことも言つて、一つだけだつてことも
いつたのに、なのに私はたくさん聞いていた。本当に失礼な奴だと
思つてゐる。でも、聞かないといぢりしないくらい不安だったのも
本当なんだ。

それを彼は、河田くんは知つてゐるのだろうか？私の不安を全て理
解してくれているのだろうか？ううん、それはきっとない。少しく
らいなら、私の不安もわかつていてくれているんだろうけど、でも
本当に少しだけなんだと思う。だって、そこから先にあるのは私の
世界、私だけの世界だから。

でも彼は、私の言葉にちゃんと答えをくれた。

「半分あつてるけど、半分は間違つてるとと思つ。あいつは、亜美は
幸せだつたんじゃない。きっと今も幸せなんだよ。泣くかどうかな
んて俺達にはわからないことかもしれないけど俺は泣かないでいる
と思う。あいつのことだから、笑つてるよきっと。だから俺達も笑
つていよう。じゃないと亜美に笑われる」

「うん。ううだよ、そうだよね。笑う、ずっと笑うよ、私
「ああ、そうしよう。それにさ、俺達が覚えている限りあいつはき
つと幸せなんだって。そりやあ絶対に自信があるわけじゃないけど、
でもそう思えるんだ。毎日、少しだけでいい、あいつのことを見つ
てると亜美は笑つているような気がするんだ」

「うん。うん、うんうん」

何度も何度も頷いてた。それで少しだけ泣いていた。涙が流れてい
るわけじゃないけど、そう私の心が泣いていた。まるで私達の世界
がはじめて一つになつたみたい。一人の世界が溶けて、崩れて、交
じり合つて、そして一つになる。そんな感じがした。それが凄く嬉
しいと、素直に感じて喜んだ。

私達が思つてゐる限り亜美は笑つてゐると思つ。

河田くんはそう言つた。それは私にとつて実感でもある。だって、
私が亜美のことを思つう時、亜美は必ず笑つてゐるから。家でも、学

校でも、あの雨の中でも。彼女は私に笑いかけてくれる。それは、まるで私に「心配しないで」と語りかけているようにも思えていた。そんなこと単なる思い過ごしかもしれないけど、でも今はそう信じたい。だって私と同じことを思う人が一人いたから。彼も私と同じ境遇の人だったから。

共感。

つまりはそういうことなのかも知れない。その共感だつて、一度きりのものなのかもしない。だけど、それでも構わない。人を信じるつてことはこんなことなんだと初めて知った気がした。それだけで少しだけ何かが軽くなつたように思えた。

ずっと私の中にあつた重りが、私一人では抱えきれない思いがほんの少しだけ消えていつた気がした。うつん、少しだけ河田くんに持つてもらつたんだ。少しだけ彼に助けてもらつたんだと思う。

そう思うことにしよう。

だつて、そう思つたほうが私も楽だし何より嬉しいから。

「ねえ、河田くん？」

「何だ」

「蕎麦でも食べてく？今日のお昼なんだけど」

「おう、食べる食べる」

「じゃあちょっと待つてて。今、作つてくるから」

「おう、待つてる待つてる

「うん、待つてて」

今日の日差しは、いつもよりも強そうに感じた。

夏を呼ぶ蝉の鳴き声と、朝日を浴びて一杯に咲き誇るアサガオと、高く大きく広がる入道雲が台所の窓からでも聞こえたり、感じたり、見ることが出来た。

夏が訪れていた。

夏をすぐ側で感じていた。

掛け替えのないモノを亡くした日、いつになつても忘れない日、私が一人になつてしまつた日、嘘をついた日、泣き崩れた日、雨の日。でも、きっとそれだけじゃない。私はあの日に全てを失つたわけじゃない。小さなものかもしれないけど、でも確かに何かを手に入れていたんだと思う。

だから、大切なものを失つて大切なものを得た日。
そういうことにしておこう。

夏は確かに訪れていた。

誰に言われるまでもなく、夏はすぐそこまで来ていたんだ。

「暑いなー」

今日の気温は、いつもよりも高くなる。

今日はきっと蒸し暑い夜になるんだろう、そう思う私は流水麺を水で洗いながら台所で一人なつていた。でも何でだろう？ 一人なのに私はちつとも不安じやなかつた。

あー、そうか。だって今は一人じゃないってわかつたからだ。私はいつだって一人じゃないんだって、近くに誰かがいてくれるつてわかつたら、だから不安になんてならない。

そう、今の私には河田くんがいる。

私と同じ境遇の中を生きているのに、しっかりと立つている。しっかりと自分の世界を持つている。いつか私も彼みたいに強く生きることが出来るのだろうか？ 彼のようにちゃんと自分の世界を持つことが出来るのだろうか？ ううん、はじめから弱音なんか言つてちゃ駄目だ。絶対にそつなつてみせる。

夏は、もう訪れていたんだろう。

夏の日々がいつまでも続き、そして明日へと流れていいくの当たり前なほどの日々を、私は大切に抱えていてあげたい。
これから夏は私にとって大切な季節になるんだろう。
そう思えることが嬉しかった。
そして何より、隣で亜美が笑っている気がした。

もう季節は夏になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7535a/>

夏の日々、そして明日へ。 -Tomorrow with summer-

2010年10月15日21時32分発行